標準学力調査（東京書籍）

稲築西義務教育学校（前期課程）

1. 調査目的等

小・義務教育学校1年生から6年生の児童の学力を把握・分析し、学校における教育指導の成果と課題の検証を行うことを通して、学力向上に関する取組の改善に役立てる。

2. 学校ごとの指標

標準スコア　国語・算数　学校平均50P以上

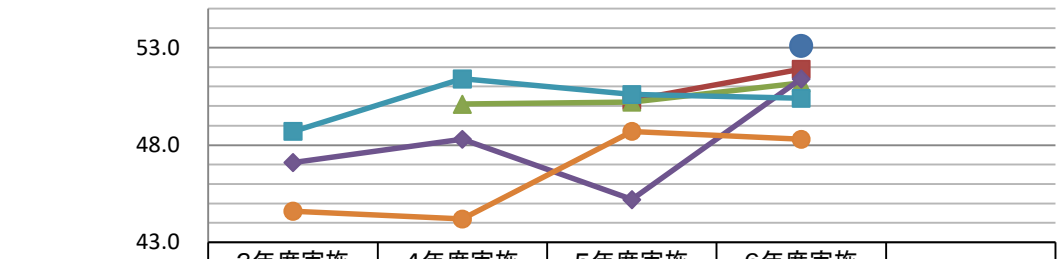
3. 指標にむけての取組

①国語、算数において、全学年、重点内容における分割授業、単元末における習熟度別授業
②国語、算数において、単元テストの達成率80%以下の児童への個別指導
③AI教材（3～6年）を活用し、個別のつまずきに特化した反復練習
④家庭学習や朝学習における読解力問題の導入と、解説や振り返りの時間の設定

4. 調査結果

※学校平均（国語・算数）4年間の推移　　（標準スコア：全国値の正答率を50とした時の換算値）

年度	3年度	4年度	5年度	6年度	
本校（A）	46.0	47.8	48.8	51.0	
嘉麻市（B）	47.0	47.2	48.5	49.8	
（A）－（B）	−1.0	0.6	0.3	1.2	0.0
全国値との差（A）－（50）	−4.0	−2.2	−1.2	1.0	−50.0



	3年度実施	4年度実施	5年度実施	6年度実施	
6年度1年生				53.1	
6年度2年生			50.3	51.9	
6年度3年生		50.1	50.2	51.2	
6年度4年生	47.1	48.3	45.2	51.4	
6年度5年生	48.7	51.4	50.6	50.4	
6年度6年生	44.6	44.2	48.7	48.3	

5. 各学校における分析

〇教科総合（国語・算数）における標準スコアは51.0であり、目標指標を達成することができた。
〇学校全体の教科別標準スコアは、国語が50.3、算数が51.7であった。昨年度と比較して、国語＋2.1、算数＋2.2の向上が見られた。分割授業や習熟度別学習、単元テスト80％以下の児童への個別指導、個別のつまずきに特化したAI教材の活用が効果的であったと考える。
〇総合（国語・算数）における全国標準スコア以上の学級は、64.7％（11学級/17学級）であった。また、教科別で全国標準スコア以上の学級は、国語52.9％（9学級/17学級）、算数64.7％（11学級/17学級）であった。さらに、教科の最高値（国語55.2、算数58.0）と最低値（国語44.1、算数45.9）の差が大きいことから、学級間の差が見られ、取組が効果的に行われた学級とそうでない学級があったことがうかがえる。しかし、全学年、概ね全国と同程度もしくは上回ることができた。
〇同一集団の経年変化（１年生は除く）を標準スコアで見ると、国語では2年生から4年生、算数では2年生から6年生が、昨年度より向上していた。今年度は、特に算数において、年間を通して継続的に、低学年・中学年を重点化・焦点化して取り組んだ成果と考える。
〇国語の「書くこと」においては、１年生から5年生、「活用」については、１年生から3年生が、標準スコアを超えていた。家庭学習や朝学習において、読解力問題を取り入れ、解説や振り返りの時間を取り入れたことが大きいと考える。しかし、算数より国語に課題があると考える。

6. 各学校における今後の取組

【継続】
〇算数における習熟度別を含む少人数分割授業の計画的な実施
〇単元テスト80％以下の児童への個別指導
〇AI教材を活用し、個別のつまずきに特化した反復練習
〇家庭学習や朝学習において、読解力問題を取り入れ、解説や振り返りの時間を取り入れる
【充実】
〇「書く活動」の位置付け（毎時間）
・自力解決の段階で、理由や根拠をもとに自分の考えを書く活動
【修正】
〇自己選択する学習活動の充実
・学び方（学習方法）や学習形態（相手）が、自己選択できる学習展開。特に、高学年では、学習状況（理解度や進度）の自覚に基づく自己選択学習の機会保障を図る。

7. 嘉麻市教育委員会としての今後の取組

◎各学校における取組を機能化し、学力向上を図ることができるように、特に次の3点について指導助言及び支援を行い、周知徹底を図る。
◆校内における学力向上検証委員会において単元テスト（全単元の80％において目標得点　を達成できた児童が学級の80％以上になることを目指す）や各学力向上の取組について検証し、授業づくりや学力向上の取組の更なる改善を図る。
◆学習評価からの授業づくり、書く活動の設定、ICTの活用という視点から授業改善を図る。そのために、校内研修等に指導主事を派遣し、具体的な指導助言や支援を行う。
◆小中一貫教育に基づき、組織的・計画的に内容の設定し、個に応じた課題の提示（AIドリルの活用等）を図ることにより、家庭学習の習慣化及び充実を図る。